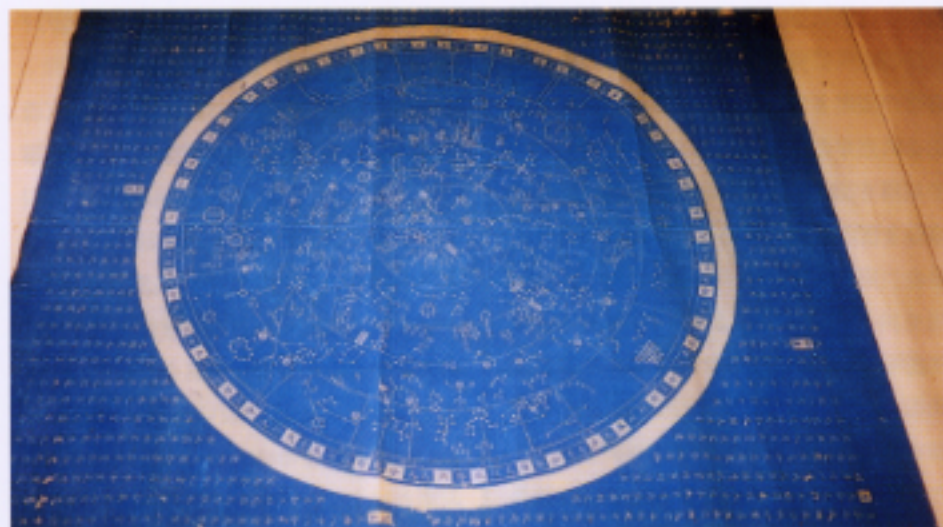


## ■研究ノート

## 寶積寺の開山伝説とその周辺

阿部 幹男（学芸第二課長）



寺宝・寶積寺の開山伝説にまつわる「星辰図」

昨年九月、一方井の寶積寺檀家総代長・武田利雄氏から次の文書が持ち込まれ、内容についてのご質問を受けました。「當寺開山之寶母者箱石城主之女子也。悪女故一世不男而三ヶ月信斗。頭上而水器頂毎月三日脱一夜明。三ヶ月之影還時安産ス。故三月和尚開名者也。十四世哲心情記。」

ご開山の尊牌の裏面に記された文章で、ご開山の出生を伝える縁起でした。たいへん希少な内容に驚きました。

内容はおよそ次のとおりです。「この寺のご開山の実母は箱石城主の姫君でした。姫はたいへん醜いお姿で一生男にご縁がなかった。姫君は一心に三日月にお祈りなされた。毎月三日の夜には家を脱し心身を清める瀧水たきみづを入れた器を頭上に頂き、月に向かい祈り明かした。するとある時、差し込む月の光を選んだ（飲み込んだ）とき懐妊され、やがてご開山を安産なされた。そう言う訳でご開山は三日月和尚と命名された」と。

この話は、敬虔な女性が一心に神仏に祈っていると、日月や星の光が体内に入り懐胎し、やがて「空海」のような立派な人物をお産みになられたという類型の話（処女受胎譚）なのです。

岩手町一方井の曹洞宗・天井山寶積寺は古来より葛巻氏の菩提寺で、閉伊地方の古

刹（源為朝の三男・閉伊頼基の建立）・華嚴院の二世三日月秀閑和尚によって文亀二年（1502）に現在の葛巻町に建立されました。のち九戸の乱で勲功をたてた葛巻氏は藩祖・南部信直公の出生地の一方井へ領地替えとなり、寛文五年（1665）寶積寺も移転したのです。現住職は第二十五世・四戸秀賢老師、今年が開山五百年にあたります。

この出生譚を現代の私たちは荒唐無稽な話として一蹴することは容易なことです。しかし、この話はマリアの受胎譚とも似ていませんか。洋の東西を問わずどうして同じような話が作られたのでしょうか。

思うに「導き救いなされる方は、安逸な生活をしている男と女のDNAから生まれた子とは違う。やはり敬虔な信仰心を抱き、真摯に修行なされている女性に、神仏のご加護があり、立派な方が生まれて来られるのだ」という思いを人々は懐いてきたためではないでしょうか。まして世の中が飢饉や疫病や戦争で乱れた時であればあるほど人々の切実な願いとして結集され、かくなる由来が形成されたのでは。

ところで、ここでたいへん興味深いのは、母上は「美女」ではなく、なぜ「悪女」なのでしょう。この話は「処女受胎譚」の中でも「悪女説話」ともよばれ、全国的にもほんとうに珍しい縁起なのです。

まず、これと同じ内容の説話を紹介しましょう。修験道の開祖「役の行者」の誕生は次のように語られるのです。

長物語に候えども、役の行者の始まり、あらあら語り聞かせ参らせん。むかし大和の国の「悪女御前」という女人がおりました。背丈八尺余、前歯が二重、牙が三重に生えむじれ、色は青く、髪は振り乱れ、物いう声さえもおどろしく、さながら鬼女のようなので、誰一人として近寄らなかつた。悪女九十三歳にして、夫がいないことを悲しんで、朝日に向かって「この婆娑世界に生をなして、鳥類畜生まで夫婦の契りはあるのに。なんとか夫と子を授けてください」と熱心に祈った。すると、なんと天のお恵みの有難いことか、懐胎し、十三月経つとお産の紐を解いたのであった。生まれた子は、即天に飛び上がり、我朝に天下り、山々谷々深山の奥まで道を開き、人々を濟度し、大峰山を懸けて、役の行者となった。翌月生まれた子も、同様に天へ飛び上がり学問をなされ、星の行者となり、我朝に天下つたのである。（常盤御前鞍馬破の一説より）



寶積寺の山門



## アノコノ世の物語 ち 重信の御前

（高野文子）と 山姥

また、前述した「空海の誕生譚」（説経節「刈萱」・高野の巻）にも、「母御は三国一の悪女」として登場します。さらには、奥浄瑠璃「田村三代記」のなかにも「悪玉御前」が醜悪なる姿に変化して登場し、二代田村・利光と結ばれ、三代田村・利仁の母親となったと語られるのです。

ではにゆえ「悪女」なのでしょう。この答えは、日本に古くから伝わる「山姥伝説」や「山神信仰」の中に潜んでいるのではないのでしょうか。

民俗学者・折口信夫は「山姥は山神に仕える巫女が原型」と指摘していますが、残忍な鬼婆のイメージが強い反面、「山姥が小さな徳利を持って二斗の酒を買いに来るが疑わずにそのとおりに量って売ったところ、その家が繁昌した」とか、「大の子供好きで、虱を子供にとってもらって、いい気分になっている」などの姿に描かれるなど福神的性格も合わせ持っているのです。これは「山神」も同様で、オコゼのような醜悪な姿をしており、破壊と豊穣をもたらす神なのです。

この延長上に、「山姥」が坂田金時の母上として登場するのです。足柄山に棲む九十歳をすぎたる醜悪なる「山姥」は、源頼光に「夢中に赤龍来りて妾に過ず。そのとき雷鳴轟くして驚きさめぬ。果たしてこの子を孕んだ」と、子・金時を懐妊したと

き様子を物語っているのです。（『源平盛衰記』巻28）。

この話は、なんと中国の漢の高祖・劉邦の出生譚（『史記』高祖本記）とそっくりではありませんか。つまり、ここでは神仏の申し子を出産する母として登場しているのです。赤龍（一神・天地の恵み）を受け、すばらしい人物を産み育てる「強くたくましい女性」こそ「山姥」であり、そして、これを「悪女」と表現したのではないのでしょうか。

さて、ここで視点をご開山の故郷の宮古・華厳院に移すことにしましょう。やはり華厳院といえば、盛岡南部藩三代・重信公が幼少の頃学んだ寺としても名が知られています。

公は利直公の五男、元和二年（1616）五月十五日閉伊郡花輪村で生まれました。母は花輪氏。前年秋利直公が領内を巡視して花輪村に至り郷土の花輪内膳の家に宿泊した折、内膳の娘・松子に寵をかけもうけさせた子です。

ところが、この「松子」のことを『南部史要・全』では「容貌甚だ醜し、公これに戯れ短刀を賜ひて記念とす、既にして同女懐胎し」と、また『南部公国史』には「利直公花輪内膳の家に宿せし際、箱石某の女杯盤の間に侍し。遂に寵を受けて懐胎す」と見えます。なんと重信公も「悪女説話」

を持っていたのです。そして、この話の発信源こそが古刹・華厳院であったのです。ここから、聖と俗のリーダー三日月和尚と藩主・重信公が神仏の申し子として登場したのでした。

思うに、ご開山の母上も重信公の母上も本当は松鶴菜々子のような美人ではなかったかと。かつ世の中を見極める英邁で気丈夫な方ではなかったのでしょうか。

元禄年間、近松門左衛門によって、この説話を素材に「編山姥」が創作・上演され、一世を風靡、浄瑠璃や舞踊の演目として今日まで伝わっています。また、浮世絵師・喜多川歌麿によって「若い美人の山姥」も描かれました。

元来、この説話は日本文化の基層のなかに脈々と流れている宗教感情のひとつが昇華されたものです。華厳院はこの基層を育みつつ教化を広めていったのではないのでしょうか。三日月和尚の開山伝承は、同じく豊間根出身の華厳院で修行し、下北の田名部の大安寺の住職を勤めた一東和尚も持っていることから、この脈流の深淵さが窺われます。

最近ある紙面に「將軍綱吉と藩主重信の縁で交流を」という見出しの記事が載っておりました。五代將軍を決める際、江戸城に集まった諸大名が沈黙する中、長老格であった重信公がその沈黙を破り館林城主綱吉公を堂々と推挙したことで決定し、後々まで將軍に重宝されたとされています。このことを知った館林市長が、わざわざ宮古市長を訪問し、両市の交流を持ちかけたことと記されていました。

この聖・俗のリーダー、一方は藩祖・信直公出生地・一方井の寶積寺に今日まで法脈を保持し人々を教化し、一方は英邁なる藩主として今日なお現代世界を動かすエネルギーを秘めているのです。



山姥の絵画（岩手県上閉伊郡宮守村の塚沢神社）